

連載

フィールド・アイ

Field Eye

ライデンから——①

ライデン大学 有泉 明

Akira Ariizumi

■多民族国家、その転換期？

昨年9月より、オランダのライデン大学法学部にて、1年間の任期で客員研究員として在外研究を始め、執筆時点で5カ月が経過した。厳しい住宅事情の中で、苦難の末ライデンのアパートに入居することができたため、生活圏は基本的にライデンで完結している。ライデンは煉瓦造りの建物と街の中心部を取り囲むように張り巡らされた運河が特徴的な街で、事前にオランダについての（乏しい）知識をもとに想像していたものとおおよそ同じような、穏やかな生活を送ることができている。

オランダは人口の16%が国外からの移民であり、これに片親が外国生まれの人々を合わせると、28%に達する¹⁾。EUのみならずトルコやモロッコ、アジアからも多くの移民を受け入れていることから、多民族国家と呼んで差し支えないだろう。本稿では、そんなオランダの民族的多様性について、そしてオランダと日本の繋がりについて、現地での体験にも触れつつ記そうと思う。

まず、外国人としてオランダに来て真っ先に感じるのが、その英語の使用率の高さである。公的機関の職員やホテルの従業員などはもちろん、市井の人々も流暢に英語を操るため、街中で道に迷った場合などは、とりあえず英語で話しかけてみれば大体は親切に答えてもらえる。この英語の使用率の高さは、英語教育の発達やオランダ語と英語の類似性にもよるといわれるが、オランダの民族的多様性とも（両者の理論的先後関係はともかく）関連していることは間違いなさだろう。オランダ語という独自の言語がありながらも、英

語を介してあらゆる国籍の人々が繋がることのできるのがオランダの特色である。

また、オランダのバラエティ豊かなレストランも、その民族的多様性を象徴しているといえよう。ライデン中心部の広場で、運河ツアー用のボートの停留所がある Beestenmarkt 周辺などは良い例である。広場の北側の通りには、寿司屋・中華料理屋・パンケーキ屋があり、ファストフードのチェーン店を挟んでラーメン屋、角にはバーガー屋が店を構える。西側には中東料理・インドネシア料理店があるほか、日本料理とアルゼンチン料理の店の大きな看板が目を引く。広場の周辺だけで、世界のほぼ全ての料理を食べられるのではないかなと思わせんばかりの多様なラインナップである。これは、本来国内最大のシェアを誇って然るべきオランダ料理が、お世辞にも美味しいとは言えないという事情も多分に影響しているのであろうが、やはり自国の料理を欲し、あるいは振る舞うことのできる移民の存在も大きいものと考えられる。

教育に目を向けると、私が籍を置くライデン大学も、やはり国際教育に力を入れている。2023年度の新入生については学士課程の23%、修士課程の36%が外国人だった²⁾。主にこれらの留学生を対象として、多くの授業が英語で開講されており、法学部だけでも実に100近い数の英語の授業が存在する。私が秋学期に聴講した国際労働法・EU労働法の授業も留学生向けの授業であったが、EU諸国のみならずメキシコや中国出身の留学生も参加していた。今期受講しているオランダ語の授業に至っては、アメリカ、イタリア、イラン、エジプトなど12カ国からの学生15人が一堂に介しており、さながら国際会議の様相を呈している。

そんな民族的多様性を特徴とするオランダであるが、日本とは地理的には遠く離れていながら、歴史的に特別な関係を築いてきた。日蘭の交流の歴史については、1600年のオランダ船リーフデ号の漂着からこれが始まり、その後江戸時代を通じて、鎖国下も含めて交流が続いたことは有名である。特に、長崎を拠点とする日蘭貿易は、西洋の物品や技術を日本にもたらし、産業、学術、文化の発展に大きく寄与した。その後、第二次世界大戦を契機に一時両国の関係は冷え込むも、サンフランシスコ平和条約以降は改善し、文化交流を中心として良好な関係を保っている³⁾。

ライデン大学と日本の関係の深さも注目に値する。

ライデン大学には、1855年に世界初の日本学科が設立され、現在でも主に政治史・文化史の研究が行われている。特に短歌や俳句は classical Japanese poetry として著名なようで、大学内の植物園に菅原道真の著名な短歌「東風吹かば…」の壁画が飾られていたり、近くの書店に松尾芭蕉の句集が平積みされていたりする。また、学生間の交流も盛んで、日本からの交換留学生に対しては、日本学科に所属する学生がバディとなり生活の手助けをしてくれる。ライデン大学は、日蘭の研究者・学生にとって学術的・文化的交流の絶好の場となっているといえよう。

さて、ここまでオランダの民族的多様性と、日本との深い繋がりについて述べてきたが、昨今これらのオランダの特色に大きな影響を与える動きが見られる。それは、極右政党である自由党 (PVV) の、2023年末の第二院選挙における最大議席の獲得を受けて、昨年7月に連立4党からなるスホーフ内閣が発足したことである。当該内閣は、当初より厳格な移民抑制政策を打ち出してきた。具体的には、帰化に必要なオランダ語能力の基準の引き上げや、オランダ国籍を取得するためのオランダ居住期間の5年から10年への延長などを計画しており、特に難民政策に関しては、難民の権利の制限を内容とする3つの法案（滞在許可期間の短縮、国を逃れた理由に応じた区別の導入、国外追放への拒否の犯罪化）が既に内閣の諮問に付されている。EUにて2026年から施行される、移民・難民問題に対する加盟国間の公平な負担を目指す「移民と庇護に関する協定 (The Pact on Migration and Asylum)」についても脱退を要請するなど、ファーバー難民・移民政策担当大臣の掲げる「史上最も厳格な難民政策の導入」の真っ只中である。

また、国際教育・文化交流への打撃となりうるのが、教育予算の削減である。内閣は財政再建の一環として、10億ユーロの高等教育⁴⁾ 予算の削減を目指しており⁵⁾、目下野党と交渉を進めている。この動きを受けて、ライデン大学人文学部も学習プログラムの廃止による予算の削減を検討しており、これには日本、中国、韓国、南・東南アジア研究の学士課程を、単一の「アジア研究」学士課程に統合する措置も含まれている⁶⁾。これに伴い、ライデン大学における日蘭交流の重要な拠点であった日本学科自体が縮小することも

懸念される。内閣は、留学生についてもその受け入れの制限を検討しており、さらには行き過ぎた「英語化 (verengelsing)」に歯止めをかけるべく、学士課程における英語プログラムの制限等を内容とする「バランスの取れた国際化法 (Wet Internationalisering in Balans)」を立案している。これは現在第二院にて審議中である。

多民族国家としてのオランダは、今重要な岐路に立たされているのかもしれない。スホーフ内閣の諸政策の当否についてはさまざまな議論があるが、少なくとも外国人である私は、多様性という現在のオランダの特質に助けられている立場であることは間違いない。次にオランダを訪れることがあれば、その際は今回よりも多くの困難に直面することになるかもしれない。1分足らずの審査ののち、管理官の「アリガトウ」の言葉に見送られながら入国することができる、拙いオランダ語で勇気を持って話しかけると、笑顔で英語を返してもらえる、そんな環境での今回の研究生活を大切にしたい。

- 1) Centraal Bureau voor de Statistiek (オランダ中央統計局) "Integratie en samenleven 2024" p. 6.
- 2) Universiteit Leiden "Jaarverslag 2023" p. 9.
- 3) シーボルトの旧邸宅を改装したライデンの博物館「シーボルトハウス」では、これらの日蘭関係の歴史についての展示物のほか、シーボルトが収集した日本の資料や動植物の数々を閲覧することができる。
- 4) オランダの「高等教育 (Hoger onderwijs)」とは、大学が提供する科学教育 (Wetenschappelijk onderwijs) と、高等職業学校が提供する高等職業教育 (Hoger beroepsonderwijs) を指す言葉である。
- 5) これに反対すべく、11月25日にはハーグで大規模なデモが開催され、約2万人の（主催者発表）教員や学生らが集まった。ライデン大学では、学生のデモへの参加の機会を確保するため、この日の通常授業への出席は必須とはしない措置が講じられた。3月10日からは、国内の大学でリリーストライキが実施され、ライデン大学がそのトップバッターとなる予定である。
- 6) そのほか、イタリア言語・文化研究の学士課程の廃止や、アフリカ研究・ラテンアメリカ研究の研究修士課程 (Research Master) の廃止などが計画されている。

ありいずみ・あきら ライデン大学客員研究員。最近の論文に「オランダにおける労働時間調整請求権について」『雇用・就業関係の変化と労働法システムの再構築』(労働問題リサーチセンター, 2024年)。労働法専攻。